

# 宮崎県教育研究連合会 教師力向上研修

## 道徳教育を支える道徳科の不易的要素とは ～読み物教材に真正面から向き合う道徳科の時間を考える～

令和2年11月14日(土)

宮崎公立大学 曾我 文敏

### ◇はじめに

- 学生アンケート調査
- 道徳科の授業＝問題解決型の授業？
  - ・国語科的な授業
  - ・学級活動的な授業
  - ・生徒指導的な授業
- 今こそ、道徳授業の基本に立ち返るとき

### ◇ I 「特別の教科 道徳」に係る課題

#### 1 「考え、議論する道徳」

- 基本的には、「考え」が存在しない道徳科の授業はない。「考えない道徳科の授業」とは、形式的で教え込む授業である。
- 「考える」とは問題意識・課題意識をもつことである。「議論する」とは多様な価値観に触れることである。

学習指導要領では、初めて具体的な指導方法として、「考え、議論する道徳」が示された。
- 道徳科では、「話し合い」が必須要件となる。学習指導要領においては、「話し合う、語る、討論する、議論する」等の言葉が使われている。「議論する」は、これまでの学習指導要領における、「話し合い」の本旨と変わらない。
- 道徳科の特質を踏まえた学習活動の中で、「主体的・対話的で深い学び」、つまり、「考え、議論する道徳」が成立する。
- 「道徳科の特質・不易的要素(基本)に立ち返る道徳科の時間」とは、「読み物教材に真正面から向き合う道徳科の時間」と捉える。

## 2 道徳科の特質

### ○ 道徳科の特質「学習指導要領解説」…( )中学校

道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていくこと。

- ・道徳的価値について理解する。(価値理解、人間理解、他者理解)
- ・自己を見つめる。(自己理解・道徳的価値を自分との関わりの中で考える。)
- ・物事を(広い視野から)多面的・多角的に考える。
- ・自己の(人間としての)生き方についての考えを深める。(内面的自覚)
- ・内面的資質としての道徳性を養う。

#### ◇ 価値理解・・・人間の強さの理解

道徳的価値を、人としてよりよく生きる上で大切なことであると理解する。

#### ◇ 人間理解・・・人間の弱さの理解

道徳的価値は大切であっても、なかなか実現することができない人間の弱さを理解する。

#### ◇ 他者理解・・・価値観の多様性の理解

人間の強さ、弱さの中には多様性があることを理解する。

### 【道徳的価値を自分との関わりの中で考えること】

登場人物の立場に立って、自分自身の問題として受け止め、これまでの自分の経験やそのときの考え方、感じ方と照らし合わせながら、道徳的価値について更に考えを深めること。

### 【物事を多面的・多角的に考えること】

多様な価値観の存在を前提に、物事を一面的に捉えるのではなく、様々な観点から、多様な感じ方や考え方によって学び考えることにより、道徳的価値のよさや意義、困難さ、多様さなどを理解すること。

(「道徳の教科化に思う」2018 曾我) より

- 道徳科の時間は、その特質を踏まえた学習活動を通して、教師と児童生徒が、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間である。

### 3 質の高い指導方法

#### (1) 3つの指導方法

- 全国的には、主に「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」、「問題解決的な学習」、「道徳的行為に関する体験的な学習」が研究されている。
- 「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」は、中心的な指導方法として、今後も実践される。
  - ・学習指導要領の本旨から
  - ・教科用図書教材の特性から
  - ・これまでの道徳研究の経緯から
- 「問題解決的な学習」、「道徳的行為に関する体験的な学習」については、児童生徒の発達段階等を考慮しながら、道徳科の特質を生かすことに効果があると判断された場合には、適切に、有効に活用する。

#### (2) 課題

- 道徳科の特質を「拠り所」として、授業づくりを行う。
- 「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」においては、教師に明確な主題設定や指導観がなければ、登場人物の心情理解のみの指導(発問)となることから、教材分析力(読み物教材に真正面から向き合う力)が求められる。
- 「問題解決的な学習＝議論すること」を目的化すると、「判断力の理解のみに偏った形式的な指導」になるなど、道徳科の特質に即した授業が成立しない。
  - ・「あなたならどうする発問」の活用については、その意図を明確にする。

## ◇2 教科用図書及び読み物教材の活用に係る課題

### 1 教科用図書への理解

- 教科用図書は主たる教材であるが、学校教育法第34条第4項の趣旨を理解する。

【学校教育法第34条第4項】

教科用図書及び第2項に規定する教材以外の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる。

- ・児童生徒の実態や、授業のねらい等を踏まえた教材選定の視点に立つとき、教科用図書を軸としながらも、幅広く他の教材(副読本等)の活用も検討することが重要である。このことは、各学校の実態を踏まえた、特色ある年間指導計画等の見直しにもつながる。
- 道徳科の教科用図書には、優れた読み物教材も多く掲載されている。中には、すべて の出版社に採用されるなど、不朽の名作と言われるものもある。このような読み物教材の価値を考えたい。
- 教科用図書にある発問例等については、参考資料として検討されるものである。あくまでも、教師の主体的な教材研究が優先する。学校や学級の実態に即した、発問(構成)が検討されるべきである。

### 2 読み物教材への理解(本資料関連項目◇3)

- これまで道徳(科)の授業において、読み物教材を活用してきたことは、教師の資質能力の向上にも大きく影響を与えてきた。道徳科の授業においては、教師も、「一人の学習者」である。
- 読み物教材の研究は、国語科(文学的文章)の指導力向上にも、重要な役割を果たしてきた。道徳科(読み物教材)と国語科(文学的文章)の研究は、相互補完の関係と言える。
  - 児童生徒が、教科用図書や副読本等の読み物教材に親しむことは、読書活動の充実と読解力向上につながるとともに、ひいては、自然や人への見方・考え方が豊かになるなど、豊かな心が育成される。

### 3 読み物教材の活用への理解

- 読み物教材の問題場面を切り取り、話し合いを進めていくなど、読み物教材が問題提供の資料として活用されることがある。問題場面前後を含めたストーリーは重要であり、その中にある登場人物の言動や気持ち(考え)を、どのように発問構成に組み込んでいくかなど、教材活用の基本を確認したい。
- 「考え、議論する道徳」、「問題解決的な学習」などが示されて以来、「モラルジレンマ学習的な学習」が見られる。読み物教材の内容が、モラルジレンマ学習に適したものであるかなどの検討が求められる。モラルジレンマ学習の効果的な活用が課題である。
- その場の雰囲気から状況を推察し、自分のとるべき行動を判断するなど、日本人のよさが表現されている読み物教材があるが、その特質が生かされない授業が散見される。
- 読み物教材を前半と後半に分けて読ませるなど、分割(分断)して取り扱う授業がある。ストーリーの顛末を隠すことによって、活発な話し合いをさせようとするものであるが、児童生徒の中には、副読本が活用されていた時代から、多くの教材を読んでいる者がいる。このような読み物教材の活用には疑問が残る。
- 読み物教材活用の指導構想が明確ではなく、ねらう道徳性(判断力、心情、実践意欲、態度)と学習指導過程(発問構成)に整合性のない授業が見られる。授業の「ねらい」に即した、読み物教材の活用が課題である。

#### ◇3 読み物教材が活用されてきた意義

(「道徳の教科化に思う」2018 曾我)より

※「読み物資料」は、「読み物教材」に読み替える。

昭和33年に「道徳の時間」が特設されて以来、読み物資料が多く活用されてきました。現在も、ほとんどの学校で読み物資料が活用されています。この項では、道徳授業に読み物資料が活用されてきた意義について述べたいと思います。

私は、道徳授業は、児童生徒だけではなく、教師も「一人の学習者」として人

間性を高める時間、教師力を育てる大切な時間であると考えます。多くの読み物資料の中には、自己実現をしていく登場人物の心情などが描かれています。授業者としての教師は、登場人物の言動の裏にある様々な気持ちや考えに寄り添うことを通して、その苦悩や勇気、喜び等を共感的に体感し、授業に臨むことが重要です。読み物資料の分析は、そのために行うものです。このような地道な取組をひとつひとつ積み重ね、教師自身も登場人物の生き方を感得することで、児童生徒の心に届く語りかけや、つぶやきを拾い上げる技が磨かれていくとともに、人としてのよりよい生き方を学び、教師力を向上させていくのだと思います。そのような教師は、児童生徒に、あるときは冷静な知的判断の基に、あるときは情動的に道徳的価値を考えさせて、道徳的実践の身構えをもたせることができるなど、道徳性を徐々に、着実に養っていくと考えます。

それだけに、特に、これから道徳の授業力等を身に付けたいと考えられている先生方には、次のような助言をしたいと思います。現在、即授業に役に立つという書籍もあり、参考にされる方もいるとは思いますが、道徳授業においては、「このようにすれば、すぐに授業がうまくいくようになる。」という方法論的な考え方だけでは、真の授業力は身に付かないということです。「4 道徳授業ができる教師の資質」で述べた資質に裏打ちされた教師として、読み物資料の登場人物の生き方と向き合いながら、地道に授業実践を重ねていくことの重要性を強調したいと思います。授業力向上さらには、教師力向上を求めることは奥が深く、広く、限りのないことですが、そのような教師になりたいと願い、努力する人であってほしいと思います。私は、今でも子どもたちと授業をする夢を見ますが、心からの言葉で勝負できない自分に、腹を立てることがあります。

なお、「小学校・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」においても、教師は「一人の学習者」とであると認識できる記述があります。

○ 第3章第1節1(1)

学習指導要領第3章の「第2内容」は、教師と児童(生徒)が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。

○ 第4章第3節3(1)

(略) 教師自らが児童(生徒)と共に自らの道徳性を養い、よりよく生き

ようという姿勢を大切にし、日々の授業の中で愛情をもった児童(生徒)への指導をすることが重要となる。

○ 第4章第4節2(2)ウ

道徳科の学習は、「人生いかに生きるべきか」という生き方の問いを考えると言い換えることができ、道徳科の指導においては、児童(生徒)のよりよく生きようとする願いに応えるために、児童(生徒)と教師が共に考え、共に探求していくことが前提となる。

#### ◇4 読み物教材に真正面から向き合う道徳科の時間を考える

「問題解決的な学習」と「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」の実践事例を通して

##### 1 「問題解決的な学習」における発問パターン(例)

① 主人公のどんな点が問題なのか。

何に困っているか。

何に悩んでいるか。

↓ ↓ ↓

② あなたならどうするか。なぜそうするのか。

解決するためには、どうしたらよいのか。

↓ ↓ ↓

③ ○○することは、相手のためになるのか。

逆の立場であったらどう思うか。

そうすることは、なぜいけないのか。

このままであったら、どのようなことが予想されるか。

↓ ↓ ↓

④ このようなとき、どうすべきなのか。

解決するためには、何が大切なのか。

(例・思いやり)はなぜ大切なのか。主人公に何と助言してやりたいか。

## 2 実践事例1～中学校教材「足袋の季節」

### (1) 出典「教科用図書」

日本文教出版、光村図書、学研教育みらい、廣済堂あかつき、学校図書、  
日本教科書、東京書籍、教育出版

### (2) 対象学年 中学校2・3年生

### (3) 内容項目 D-(22)「よりよく生きる喜び」

### (4) 教材内容(概略)

主人公は、冬の寒さが厳しい小樽で郵便局の給仕をしていたが、足袋を買う余裕もなく生活していた。そんなある日、上役の言い付けで、十銭玉を持って大福餅を買いに行く。そのとき、大福餅を売るおばあさんは、主人公が十銭玉を渡したにもかかわらず、「五十銭玉だったね？」と聞く。主人公は、おつりで足袋が買えるという考えがひらめき、思わず「うん。」と言って四十銭を受け取る。

その後、主人公は悔恨の念などで胸を苦しめていたが、札幌局に採用になり初月給をもらうと、すぐに果物籠を手におばあさんの所へ行く。しかし、おばあさんは亡くなっていた。

### (5) 実践事例

#### ① 「問題解決的な学習」中心の授業

1 これまでの生活経験の中で、後悔をしている自己の言動について話し合う。

・事前にアンケート調査を行い、生徒の実態を把握しておく。

2 教材の前半部分を読み、主人公のとした言動について話し合う。

Q1. 自分が主人公の立場だったら、四十銭を渡すおばあさんに、正直に間違いを言いますか。

・ネームカードを活用し、黒板に自分の考えを意思表示させる。

・「言う」と「言わない」それぞれの立場で意見を交流させる。

・意見交流後、考えが変わった人がいるかどうか確認する。



3 教材の後半部分を読み、主人公の気持ちを話し合う。

Q2. おばあさんの死を知り、「むしように自分に腹が立ってしょうがなかった。」のは、なぜでしょうか。

Q3. その後、主人公がくじけずにやり通せたのは、なぜだと思いますか。

Q4. 主人公は、おばあさんにどんな心をももらったのでしょうか。

4 自分の生活を振り返る。

○ 今日の学習を通して考えていることを書きましょう。

② 「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」中心の授業

1 教材「足袋の季節」について話し合う。

○ 教材名、主題名、「足袋」、時代背景、主人公の経済状況・生活環境、あらすじ、教材を読む視点について

2 教材を読んで話し合う。

Q1. おばあさんの「五十銭玉だったね？」の言葉に、思わず「うん。」と答えたとき、また「踏ん張りなさいよ。」と四十銭を握らせてくれたとき、主人公はどんな気持ちだったでしょう。

○ 人には、そのような弱さがあるのでしょうか。それでよいのでしょうか。

Q2. その後の主人公は、日夜胸を苦しめたとありますが、心の中には、どんな思いがあったのでしょうか。

○ おばあさんのどんな姿が、頭に浮かんできたのでしょうか。

○ そこまで、自分を責めなくてもよいのではないですか。

Q3. 流れていくかごを見ている、主人公の心の中には、どんな気持ちが込み上げていたのでしょうか。

○ そこまで泣かなくてもよいのではないですか。もう罪を償うくらい自分を責めてきたのだから。

○ くじけずにやり通せた主人公は、どんな心をもつ人だったのでしょうか。

3 これまでの自分を振り返り、「内面的自覚の姿」について話し合う。

・「内面的自覚の姿」を見て、自己の考えをまとめる。

ア	今まで気付かなかったことに	気付いた
イ	もやもやしていたことが	はっきりした
ウ	わかっていなかったことが	わかった
エ	迷っていたことが	確かになった
オ	足りないところが	よくわかった
カ	頭でわかっていたことが	しみじみわかった
キ	わかっていたことが	よくわかった
ク	今まで思っていたことが	違うものになった
ケ	わかっていたことが	わからなくなった

#### (6) 教材「足袋の季節」に真正面から向き合う

本教材を活用する際は、筆者が1920年代の出来事を、回想してつくった作品であることから、時代背景、主人公の経済状況・生活環境等を踏まえることが重要である。おぼさんの冷遇、足袋も買えないほどの経済的な苦しさ、極寒の地(小樽の1月、2月の最高気温は、零度を下回る)での勤務の厳しさなどにより、心も寒かった(寂しかった)主人公をしっかりと捉えさせることは、問題場面(「うん。」と嘘をつく場面)に大きな関わりをもつ。そして、主人公の人間性を認めながら学習を進めたい。苦しい生活環境に耐えていたこと、四十銭をもらったときに罪の意識に悩んだこと、その後も日夜悔恨の念で苦しんでいたこと、月給をもらおうと汽車に飛び乗るようにしておぼあさんをたずねたこと、今もなお、悔恨の念を持ち続けていることなど、学習者としてその人間性を受け入れたい感情になる。また、本教材にみられる「人間としての弱さ」は、主人公だけの弱さではなく、すべての人が皆もっているものであることを、生徒に気付かせることが重要である。それを基に、人はだれしも弱さをもっているが、それを乗り越える(乗り越えようとする)強さもあることに気付かせたい。本教材の活用の意図は、人には人としての弱さや醜さがあるが、それを乗り越えようとする強さや気高さもあることを、心情的にじっくり考えさせるところにある。

これらのことから、問題場面において「あなたならどうしますか。」と発問す

ることは、本教材の有効な活用とは言えず、主人公と生徒との間には、様々な環境の違いがあることを考慮する必要がある。これまで長年にわたり評価されてきた本教材の価値を、十分に分析した上で活用したい。

指導においては、教材が長文であり、一読では内容理解の困難な生徒がいることや、時代背景、小樽の位置及び気象環境、「足袋」などの知識を得て授業に臨めるようにするため、事前に教材を読む活動等を設定したい。

展開前段においては、まず、主人公とおばあさんとの四十銭のやり取りの場面を取り上げる。おばあさんの「五十銭玉だったね？」の言葉に思わず「うん。」と答えたとき、また「踏ん張りなさいよ。」と四十銭を握らせてくれたときの主人公の気持ちを、しっかりと考えさせたい。生徒からは、「四十銭があったら足袋が買える。」という反応が予想されるが、それで終わることなく、補助発問「人には、そのような弱さがあるのでしょうか。それでよいのでしょうか。」と問い、「人間としての弱さ」について自分との関わりの中で考えさせ、自分たちにも主人公と同じ弱さがあることに気付かせる。(これらの発問等により「人間理解」、「他者理解」を図る。)また、ここでは、おばあさんが主人公のうそに気付いていたかどうかは、問題として扱うことはしない。そのことは、教材文に直接表現されておらず、真実は分からない。そのことは、「ねらい」への迫りにおいて、影響を与える要素ではなく、「これで足袋を買って踏ん張りなさいよ。」と、おばあさんが四十銭を渡してくれたという主人公の思いがすべてである。

次に、悔恨の念で悩む主人公の気持ちを取り上げる。ここでも、生徒からは「どうして四十銭を受け取ったのか。」など、悔恨の念に関する反応が予想されるが、それだけで終わることなく、主人公に共感させる補助発問を投げかける。補助発問1「おばあさんのどんな姿が、頭に浮かんできたのでしょうか。」では、おばあさんの表情、声、姿勢などを多面的・多角的に考えさせるようにする。補助発問2「そこまで、自分を責めなくてもよいのではないですか。」では、主人公の思いに共感しながら、その人間性のよさを認め、徐々に「ねらい」に迫っていくよう導く。

展開前段の終わりにおいては、「自分に腹がたってしょうがなかった。」、「くだものかごを川に落としてやった。」をおさえ、泣けて泣けてどうしようもない主人公の心情を、教師もその辛さに共感しながら考えたい。その際、教師は

「そこまで泣かなくてもよいのではないですか。」などを生徒につぶやき、おばあさんの存在がなくなったことを、どうしようもできない現実(自分の罪を償えない現実)として、受け止めている主人公を捉えさせる。そして、補助発問「主人公は、どんな心をもつ人だったのでしょうか。」により、おばあさんからもらった心を支えに、自分の弱さや醜さに決別しようとしている主人公について話し合い、ねらいとする価値に迫りたい。

### 3 実践事例2～小学校教材「手品師」

#### (1) 出典「教科用図書」

日本文教出版、光村図書、東京書籍、学校図書、教育出版、  
学研教育みらい、光文書院、廣済堂あかつき

#### (2) 対象学年 小学校5・6年生

#### (3) 内容項目 A-(2)「正直、誠実」

#### (4) 教材内容(概略)

腕はいいが、あまり売れない手品師がいた。ある日、しょんぼりとしている少年と出会う。そこで手品師は、少年に様々な手品を見せる。二人は仲良しになり、明日も手品を見せる約束をして別れる。

その日の夜、友人から大劇場への出演の話を聞かされる。少年と約束した日と同じ日であることから、手品師は悩みに悩むが、最後は大劇場への出演を断り少年との約束を守る。

#### (5) 実践事例

##### ① 「問題解決的な学習」中心の授業A

1 「誠実」について話し合う。

2 教材の前半を読んで話し合う。

Q1. 手品師が男の子に「きつと来るよ。」と約束したのは、どんな気持ちからでしょう。

Q2. 大劇場での話がきたとき、みなさんが手品師のたちばだったら、どうしますか。それはどんな考えからですか。

・ペアで話し合った後、全体で話し合う。自分の考えが変わった児童は、心のものさしの位置を変えさせる。

3 教材の後半を読んで話し合う。

Q3. 手品師は、男と子の前でどんな気持ちになっているでしょう。

○ 「誠実な人」とは、どんな人でしょう。

4 これからの自分を考える。

・今日の学習を通して、これから自分はどうかについて書きましよう。

## ② 「問題解決的な学習」中心の授業B

1 主題に関わる身近な事例を紹介する。

2 教材の前半を読んで話し合う。

Q1. 友人からの電話に手品師は迷っていましたが、手品師はどんなことを考えていたでしょう。

Q2. 手品師は迷いに迷っていますが、どんな解決方法が考えられますか。その中で、最も実行できそうな方法はどれですか。

3 教材の後半を読んで話し合う。

Q3. なぜ手品師は、みんなが考えたような方法をとらずに、男の子との約束を守ったのでしょうか。

4 感想を書く。

## ③ 「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」中心の授業

1 教材「手品師」について話し合う。

○ 教材名、主題名、登場人物、あらすじ、教材を読む視点について

2 教材を読んで話し合う。

Q1. 男の子と町で出会い、手品を見せた手品師はどんな気持ちだったでしょう。

Q2. 大劇場への出演の話聞いたとき、手品師はどんなことを考えたでしょう。それぞれの考えの中には、手品師のどんな気持ちがあるのでしょうか。

○ あんなに男の子と約束したのに、大劇場へ行きたいと思うのはどうなのでしょう。

- 人は、他の人より自分のことを優先して考えるところがあるのでしょうか。手品師は、自分のことを優先して考えてはいけないのでしょうか。
- Q3. 翌日、男の子の前で懸命に手品をしている手品師は、どんな気持ちだったでしょう。
- 手品師を突き動かしたものは、何だったのでしょうか。
- 手品師が大切にしていたものは、何だったのでしょうか。
- 人は、そこまでできるものなのでしょうか。
- 3 これまでの自分を振り返り、「内面的自覚の姿」について話し合う。
- ・「内面的自覚の姿」を見て、自己の考えをまとめる。

#### (6) 読み物教材「手品師」に真正面から向き合う

「手品師」は、長年にわたり、多くの学校で道徳授業に活用されてきた教材である。道徳が教科化されて以降も、すべての教科用図書に掲載され実践されている。ストーリーとしては「売れない手品師が、男の子との約束と大劇場への出演のはざまに悩むが、最後には男の子との約束を守る。」であり、児童にとってわかりやすい教材であるが、教師にとっては、高い評価を受けてきただけに、分析する力が試される教材でもある。これまでも、多くの授業研究が行われてきたが、解決策を模索したり、男の子との約束が前提で話し合いが進められたりするなど、児童が手品師の心情に真正面から向き合うことなく、収束していく授業が多く見られた。男の子との約束を守ることが正論であるとわかってはいても、大劇場に出演する方に魅力を感じる児童が多くいることも、踏まえたいところである。

教材分析においては、大劇場への出演をきっぱりと断った手品師の心情、その後少年の前で手品をする心情を、どのように分析するかが大切なポイントとなる。苦しい生活にもかかわらず、一生に一度かもしれない、有名になるチャンスを捨ててしまうことが、その場で判断できるものなのか。利害によって、自分を優先させる人間の一面にも触れ、悩む手品師に共感させるようにしたい。教師自身も、手品師の立場で思い悩むことが求められ、その先に、手品師の人間としての強さが理解できる。教材の中にある事実(男の子との約

束を守ったこと)に、真正面から向き合う授業(考える授業)を望みたい。

展開前段の前半においては、まず、男の子と出会った時の手品師の気持ちを話し合った後、友人から大劇場への出演の話聞く場面を取り上げる。それは、手品師が男の子との触れ合いの中で抱いた気持ち、彼の心の葛藤につながるからである。そして、発問「大劇場への出演たでしょう。」・「それぞれの考え(①男の子との約束を守る②大劇場へ行く③どちらか迷う)の中には、手品師のどんな気持ちがあるのでしょうか。」を問う。ここでは特に、「②大劇場へ行く」気持ちを取り上げ、「お金ががもうかり、有名にもなれる。友人の気持ちに応えたい。お客さんを喜ばせたい。」などを引き出した上で、補助発問「あんなに男の子と約束したのに、大劇場へ行きたいと思うのはどうなのでしょう。」「人は、他の人より自分のことを優先して考えるところがあるのでしょうか。」により、複雑な人間の心の有様を教師と児童全員で共有したい。それは、児童に、手品師の胸中を自分との関わりの中で考えさせることを意図するものでもある。その後、「手品師は、自分のことを優先して考えてはいけいのでしょうか。」と投げかけることで、話し合いが深まることを期待したい。そして、最終的には、手品師自身が、迷いに迷った末、真剣に考え出した判断が、正しい判断であることに気付かせる。また、手品師が友人や客に対して、誠実でありたいとする気持ちも大切に扱い、単に大劇場へ行くことは不誠実である、という考え方で指導しないようにする。

なお、児童の中から、「約束の場所に置手紙をしておけばよい。」「男の子を大劇場へ一緒に連れていけばよい。」などの発言があった場合は、手品師がそのような行動を取らなかったことをおさえるが、手品師のために、様々な思いをめぐらせてくれたことを賞賛する。また、「あなたが手品師だったら、どうしますか。(男の子と大劇場のどちらを選びますか。)」などを発問して、話し合うことは避けたい。「手品師はどうすべきか。」と置き換える児童もいるなど、とうてい手品師の状況に立てるものではないことから、正論を強いることにつながり、自己の生き方についての考えを深める授業にはならない。どちらを選ぶかではなく、児童が教材の中にある事実に向き合い、手品師の生き方について、自分の考えを深めることが重要である。

展開前段の後半においては、男の子との約束を守り、手品を披露している

場面を取り上げる。苦しい生活にもかかわらず、一生に一度かもしれない、有名になるチャンスを捨ててまでも、男の子との約束を守った手品師の心情を、しっかりと捉えさせたい。発問としては、「翌日、男の子の前で懸命に手品をしている手品師は、どんな気持だったでしょう。」であるが、補助発問「手品師を突き動かしたものは、何だったのでしょうか。(手品師が大切にしていたものは、何だったのでしょうか。)」や、「人はそこまでできるものなのではないでしょうか。」も併せて投げかけ、手品師が他者だけではなく、自己にも誠実であったことに触れながら、児童が自分との関りの中で、生き方についての考えが深められるよう導く。

なお、この場面においても、まだ大劇場への思いを断ち切れまいとする発言があれば、それも大切に受け取り、そのような人間の側面も認めつつ、それを乗り越えようとする人間の強さがあることに気付かせる。

## ◇5 読み物教材に真正面から向き合う道徳科の時間、そして授業とは

### <1> 道徳科の特質を踏まえた教材分析に基づく授業

- 道徳科の時間が成立する前提は、教師が道徳科の特質を踏まえた教材研究を行い、道徳的価値についての理解を基に、問題意識・課題意識をもって取り組む、自分との関わりで考える、物事を多面的・多角的に考える、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習活動を展開することである。そして、この学習活動を重ねていくことで、「主体的・対話的で深い学びのある授業」、つまり、「考え、議論する道徳」が実現する。

「読み物教材に真正面から向き合う」授業とは、道徳科の特質を踏まえた、教材分析に基づく学習活動の中で、「人としての生き方を真剣に学ぶ」授業である。

- 道徳科の特質の中で、特に言及したい内容は、「自己(人間として)の生き方についての考えを深めること」、つまり「内面的自覚」である。今後も、道徳科の授業において、この特質を踏まえた学習活動までをしっかりと行うことが求められる。「展開後段」という言葉自体は、学習指導要領解説にはない。また、現在、学習指導案上に「展開後段」の表記がないものも多く見られるようになったが、道徳科の授業の中核である「展開後段」を再認識し、教師は「内



面的自覚」を具体的にイメージしながら、授業を構想することが重要である。「読み物教材に真正面から向き合う」授業とは、「自己に真正面から向き合う」授業とも言える。

## <2> 教材全体にある事実に真正面から向き合う授業

(本資料関連項目◇2の3、◇4の2、3)

○ 教科化以降、「問題解決的な学習」として、読み物教材の登場人物が葛藤する場面などを大きく取り上げ、多くの時間を充てる授業事例を見ることがある。具体的には、次のA、Bの事例である。

A「この問題を解決するには、どうしたらよいでしょう。」と投げかけ、解決方法を考えさせるなど、方法論の話合いに陥る授業(主に解決方法を話し合っ  
て終わる授業)

B「あなたならどうしますか。」と投げかけ、登場人物の状況に立たせるなど、仮定の話合いに陥る授業(事後、主に取るべき行動などを話し合っ  
て終わる授業)

登場人物が葛藤する場面などは、あくまでも教材全体の中の部分であり、その前後にある心の動きや性格、様々な人間関係、生活環境、時代背景等も深い関連性をもっていることから、疑問が残る事例である。また、葛藤場面やその後の価値実現した事実に向き合い、そのときの気持ちなどを考えることなく、児童生徒が自己の生き方についての考えを深められるのかという課題も浮き彫りになる。

読み物教材の作者には、それを通して伝えたいことがあり、そこには道徳科の授業の「ねらい」が存在する。教師は、その真意を理解し授業化する力、教材の部分ではなく全体にある事実に、真正面から向き合い分析する力が求められる。

【参考】「あなたならどうする」発問の課題

◇ 児童生徒は道徳的価値を、真に自分との関わりの中で考えることができるのか。

◇ 児童生徒の心理はどうなのか。「このようなとき、どうすべきなのか」と置き換えて考えるのではないか。また、分かりきったことを言わせるこ

とにつながるのではないか。

- ◇ 正論を主張する児童生徒は、何を学ぶのか。反正論を主張する児童生徒は、学習の成就感(納得感)を味わうことができるのか。
- ◇ 教師は児童生徒と共に、自己の生き方を考えているのか。教師の目線はどこにあるのか。

### ＜3＞ 教師の明確な「指導の意図」のもとに教材を活用する授業

- 読み物教材を有効に活用するためには、「指導の意図」を明確にすることが求められる。「指導の意図」を明確にすることは、指導する内容項目の理解(価値分析と学年の系統、重点の理解)や、児童生徒の実態(内容項目に関わる成長や課題)等の把握のもとに、道徳性の諸様相(判断力、心情、実践意欲、態度)の中から重点を定め、「ねらい」を設定するなど、明確な指導構想を立てることである。そして、このプロセスの中で教材が選定され、有効に活用されることになる。「読み物教材に真正面から向き合う」力とは、教師が「指導の意図」を明確にして、その主体的な指導観により教材の特質やよさを見だし、それを有効に活用する力である。

なお、「問題解決的な学習」を実践する際には、教材の特質を十分に検討した上で活用するなど、教材のよさが失われないよう熟考を望みたい。

- 学習指導要領解説「第4章第1節・2(2)年間指導計画の内容」においても、「(オ)主題構成の理由～ねらいを達成するために教材を選定した理由を簡潔に示す。」と述べられている通り、「ねらい」の設定を受けて、教材を選定することが原則とされている。

教科用図書が活用される環境の中では、すでに教材が選定されている状況はあるが、同解説「(エ)教材～教科用図書やその他、授業において用いる副読本等の中から、指導で用いる教材の題名を記述する。」のように、広く副読本等を含めた教材選定は重要である。道徳科においては、「特別の教科」になって間もないことから、教科用図書の教材を主に活用し、その配列順に35時間(34時間)の授業が行われていると考えるが、今後一定の期間を経て、従来の教材選定の考え方が再確認されることを望みたい。

#### <4> 教師が児童生徒と共に教材にある人間としての生き方を学ぶ授業

- 道徳科における教師の指導姿勢について、学習指導要領解説から何点かを抜粋すると次のように述べられている。

【本資料◇3・再掲】

・第3章第1節1(1)

学習指導要領第3章の「第2内容」は、教師と児童(生徒)が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。

・第4章第3節3(1)

(略) 教師自らが児童(生徒)と共に自らの道徳性を養い、よりよく生きようという姿勢を大切にし、日々の授業の中で愛情をもった児童(生徒)への指導をすることが重要となる。

・第4章第4節2(2)ウ

道徳科の学習は、「人生いかに生きるべきか」という生き方の問いを考えると言い換えることができ、道徳科の指導においては、児童(生徒)のよりよく生きようとする願いに応えるために、児童(生徒)と教師が共に考え、共に探求していくことが前提となる。

このように、道徳科の授業においては、教師は「一人の学習者」としての姿勢をもつことが重要である。それは、教師自身が教材分析の段階から、登場人物の生き方に照らし自己の生き方を考えるなど、教材に真正面から向き合い、生き方を学ぶ姿勢である。

これは、道徳科の授業を支える、教師の大切な資質能力の一つである。

#### <5> 年間指導計画における教材の位置付けを踏まえた授業

(本資料関連項目◇5<3>)

- 現在、道徳科において、教科用図書教材を配列順に活用し、授業が行われていることに異論はないが、今後(一定の期間を経て)、各学校ごとに全体計画や年間指導計画等が見直されることを期待したい。特に、年間指導計画は授業に直結するものであり、重点内容項目を踏まえながら、年間を見通して「ねらい」を設定したり、教材を選定(配置)したりするなど、そ

の見直しは今後の大きな課題である。この課題解決のプロセスの中で、年間指導計画における教材の位置付けが明確となり、教材に真正面から向き合うことができる。

学校教育を取り巻く様々な問題や課題はあるが、道徳教育(道徳科の授業)について語り合える環境が、先生方に少しでもつくられていくことを希望してやまない。

## <終わりに>

- 砂上の楼閣
- 元ラグビー日本代表ヘッドコーチ  
エディージョーンズ氏の言葉

## <参考文献>

- 小学校学習指導要領(平成29年3月 文部科学省)
- 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(平成29年7月 文部科学省)
- 中学校学習指導要領(平成29年3月 文部科学省)
- 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(平成29年7月 文部科学省)



宮崎公立大学 教職支援室 曾我 文敏

【電話】

0985-20-4808

【メールアドレス】

soga@miyazaki-mu.ac.jp

